序

漢方三考塾主宰　寺師　　睦宗

「腕があっても、頭がないと早く行き詰まる」

この言葉を、東京芸術大学々長平山郁夫氏は学生時代　伯父さんから聞かされた。

この箴言は、芸術家ばかりでなく医術を学ぶ者にとっても同じといえる。

医師としていくら腕があっても、頭がないと早く行き詰まり芯がとまることは、否定できない。

漢方で頭の芯が早く行き詰まらないためには、処方を徹底的に分析し、マスターしなければならぬ。

本書の『漢方処方学時習』は、論語の<学びて時に之を習う。また説（よろこ）ばしからずや－漢方の処方を、学んだことを機会あるごとにおさらいすることは、なかなか愉快なことではないか－>より命名されたものと思われる。誠によき漢方の時習書である。

先師大塚敬節先生は、「漢方は奥が深くて広いから、方向を間違っているといくら勉強しても役に立たない」と話しておられた。

本書は、奥深くて広い古今の漢方処方を方向を間違わず、あらゆる角度から明快に解説してあり、臨床に役立つ良書である。
この良書を機会あるごとに学習すると、頭が行き詰まることはない。

医家修業は学と術と相俟って成るものである。頭の学と腕の術とを相備えた医師こそ、良医といえる。

著者が先年刊行された『腹証圖解：漢方常用處方解説』を併読されると、よく理解できよう。